

## 『は組小町』 あらすじ

日本橋一帯の火消しを担う一番組。一番組の中の「は組」の頭（かしら）、権衛門（ごんえもん）の一人娘、お初（はつ）は今年十九歳。大層な美人で「は組小町」と呼ばれている。また、源次（げんじ）は次の「は組」の頭になる男でお初の許嫁（いいなずけ＝婚約者）である。

一方、一番組の頭取（とうどり＝元締め）である「い組」の松兵衛（まつべえ）には、目を掛けている三五郎という者がいた。ある日、三五郎からお初を嫁に迎えたいと聞かされた松兵衛は権衛門のところに出かける。しかし源次という許嫁のいるお初はこの話を断る。

松兵衛に恥をかかされたと叱られ、お初には振られ、三五郎は源次への恨みを募らせていく。

お初と源次の気持ちを知った松兵衛の力添えにより、お初と源次は夫婦になり玄治店（げんやだな＝江戸日本橋付近の古くからの地名）に所帯を持つ。

その年の暮れの二十五日、火消しに出た源次は黒焦げの姿で自宅に運ばれ、「あぶられた・・・」の一言を残して死んでしまう。

纏（まとい＝火消しの各組が用いた旗印）持ちは先に上がると、後に上った纏持ちが下りないうちは、そこを退くことができない。今回の火事で一番に上った源次は、後から上がった三五郎が下りなかったので退くことができず、ついには火の中にのみ込まれてしまったのだ。お初の件で源次を恨みに思っていた三五郎がわざと下りなかったのだらうと父親は言う。夫の亡骸の前で嘆くとともに三五郎を憎むお初。

翌年正月七草、浅草で火事が発生する。「は組」の新吉が纏を持って出ようとするが、使い者から、大事な用があるからすぐに頭取の家に行けと告げられる。新吉は代わりの者に纏を託し、急いで頭取の家に向かう。火事現場では、土蔵の屋根に先に上った纏持ちは「い組」の三五郎。続いて「は組」の纏持ちが上がるが、実は新吉のふりをしたお初で、源次の仇を打つためだった。火の手は強まるが「は組」の纏持ちが下りないので、三五郎は退くことができない。下りてくれるよう懇願する三五郎。その前でお初は正体を現す。驚いた三五郎は火の中へと落ちた。三五郎は死に、息も絶え絶えのお初は玄治店の自宅へ運ばれる。源次の仇を討てたことを知ったお初は静かに冥土へと旅だった。

(江戸時代の消防豆知識)

火消し：江戸時代の消防隊。

木造家屋が多い江戸の町では火事が多発した。このため町ごとに消防隊を組織した。これが町火消である。

いくつかの町を「組」とし、いろは四十七文字に、「ん」を加えて四十八組にした。各組では独自の纏（まとい）が作られ、組のシンボルとした。

更に、四十八組を一番組から十番組まで十の大組に分け、大纏を与えて、より多くの火消人足を現場に動員できるようにした。

纏持ち：組の中で体力、威勢ともに優れた者が纏持ちに任命された。

火事の現場では屋根の上にあがり、纏を振って消化活動の目印とし、仲間たちの士気を鼓舞した。

あぶられる：

纏が一つの屋根に何本も立つとき、火の勢いにあおられて下りる場合は、後から上がった者が先に下りて、先に上った者が一番最後に下りるのが火消しの掟（おきて＝決まりごと）である。

後から上がった纏持ちが下りない以上、先に上った纏持ちは、たとえ火に焼け焦げて下りないのが、纏持ちの意気地といわれた。

後から上がった纏持ちが火に強く意地が悪いと、わざと頑張って前の纏持ちを苦しめる。

これを「あぶられる」という。

以上